

平成8年度

地域畜産状況レポートNo.3

社団法人 熊本県畜産会

子牛は商品である

—繁殖牛100頭を目指して—

球磨郡上村清水193 平川 綱英 氏

平川さんの住む清水区は、球磨郡上村の西部に位置しており、昭和22年に元台湾引揚者を中心として53戸が（後に60戸）入植し、山林・原野を鍬による人力にて開墾して形成された集落であり、昭和37年5月には、当時皇太子であられた今上天皇陛下御夫妻の行啓の栄に浴した開拓地である。

昭和40年から開田事業に取り組み110ヘクタールの水田を造成し、更に県営圃場整備事業によって、一区画30アールの圃場整備を実施した。土壌は霧島火山系の黒色火山灰土で、生産力は非常に低かったが、その後土壌改良等地力増進に盡力され、現在では一般の既存農地よりも優るとも劣らない生産力をあげている。

農家は、水田利用の米・たばこを基幹として麦・大豆・酪農・肉用牛を組み合わせた土地利用型複合経営が主体である。

多頭飼育で70%の自給率

平川さんは、繁殖牛84頭（黒牛54頭、褐牛30頭）を飼養されている、肉用牛繁殖農家である。

経営耕地面積は、水田650アール（うち借地150アール）で水稻を150アールを栽培し、他は総て飼料作物を作付けしている。

冬作はイタリアンを800アール（うち150アールは期間借地）夏作として250アールを早期にトウモロコシを作付し、跡作にソルゴー、なお残りの250アールにソルゴーのみを作付し自給している。

他に、周辺農家と堆肥交換で大麥稈500アール分と稲ワラ500アール分をロールベールにして確保している。購入粗飼料は羊草ペールを50トン、子牛育成用としてパーミューダグラス（乾）30トンであり、粗飼料の自給率は70%程度（生草換算）と推計される。

価格低迷時こそ増頭のチャンス

平川さんは、台湾引揚後昭和22年（当時12才）に御母堂、姉達と清水に入植し、一畝・一畝の開墾が始まった。当初は作物の生育も悪く自家の食糧さえも不足がちで、空腹に苦しめられながら姉達と共に、御母堂の手助けに懸命であった。

昭和25年中学を卒業と同時に、一家の大黒柱として本格的に農業に取り組み、甘藷、落花生、開田後は米・たばこを生産し、当初200アールの畑から逐次規模を拡大し、現在では水田500アールを有している。

肉用牛については、常時2～3頭の繁殖牛を飼養していたが、益々厳しく成っていく水田転作に対応するため、肉用牛の規模拡大を決意し昭和55年、肉用牛集約生産基地育成事業によって、畜舎建設と同時に7頭に増頭し、その後も毎年平均5頭を導入し、昭和60年には早くも25頭目標を達成されている。

特に価格が安い時こそ増頭のチャンスと57～58年の子牛価格低迷時には、回転を早めるためにと成牛を中心に導入されている。



連動スタンションの繁殖牛舎



日中は殆ど舎外に

子牛は商品である

ところがその頃、牛肉の自由化論争は高まりマスコミでも大きく取り上げられていた。この分ではいずれ自由化は避けられないと判断され、今度は所得の増大確保にと50頭規模を目標にし、飼料給与も省力化のためサイレージ中心の給与体系に切り替えられた。

この目標も平成2年には達成されている。

その後も平川さんの多頭化は止まるところを知らず、増頭が続いている。特に平成2年には宮崎県小林市より黒牛5頭を導入して以来、漸次黒牛を増加し、現在では黒牛54頭、褐牛30頭を飼養している。

平川さんの持論は、「子牛は商品である。購買者（主として肥育農家）の希望する子牛を生産し、高く買って頂く」であり、品種、系統、子牛育成には充分配慮されている。

徹底した低コストの追求

喜ばれる商品としての品質向上と、生産コストの低下をはかるため

- ① 良質粗飼料を生産確保して、購入飼料は極力節減する。
前述したように、84頭に多頭化しても粗飼料自給率は70%を保っているが、目標頭数100頭に達しても70~80%の自給率を維持するよう努力する。
- ② 母牛の償却費を抑えるため、素牛導入に当たっては肉質を重視する点から、系統には極力配慮するが、異常な高価格牛には手を出さない、なお、10産以上の分娩を目標にしている。
- ③ 受胎率の向上、現在の平均種付回数は1.3回で分娩間隔は11.5ヶ月である。正常な発情再帰のため、分娩後は十分な栄養分を給与する。発情発見には特に留意し、管理室からも牛の状態が良く観察できるように、窓設置に工夫している。
- ④ 不受胎牛（3~4回種付）は早目に廃用する。
- ⑤ 施設、機械についても必要最小限にとどめる。
- ⑥ このようにして、繁殖牛1頭当り（社員1人当たり）1日の所得は、最低300円は稼いでもらっていると話される。

ちなみに平成8年の子牛総売上げ高は、63頭で22,531千円であった。出荷頭数が異常に少ないようであるが、この点平成7年までは9ヶ月令で出荷していたものを、8年から10ヶ月令（購買者の要望）に延ばしたためで、従来通りにすると70頭前後の出荷となる。

従って、平成9年には正常な頭数（約75頭）に成る予定である。

同志との連携を大切に

平川さんは、現在球磨地域肉用牛経営研究会（多頭飼育農家の構成員32名）の会長をされており、会員相互の親睦と情報交換、研修会や先進地観察等を実施して、畜産経営、技術の向上をはかっておられる。

活動の一端を述べると、昨年、宮崎県綾町の共同子牛育成施設を視察研修されたが、それに刺激されて、球磨地方にもこの施設を建設することによって、①子牛育成に要する労力は省力化され、②高齢化対策や多頭化が容易になり、③育成子牛は平準化され市場評価は高まるとの信念から、畜産農家はもとより各関係機関に働きかけ、実現に向かって奔走されている。

なお、最近では婦人部も一行17名（1泊2日）で鹿児島県串木野市他の、肉用牛繁殖肥育一貫経営の優良事例を研修し、その熱心に聞きいる態度は主人達以上に立派であったとのことである。

異業種の体験

平常時の飼養管理は、夫婦で朝2時間（7時頃）、夕2時間（5時頃）の作業時間である。

後継者は、二男の英二郎さん一家5人と同居して、メロン等を栽培し耕種部門を息子さん夫婦が担当し、なお平成2年には牛の人工授精師の免許を取得し、平川家畜人工授精所を開業していたが、異業種を体験することにより、角度の違う視点から我が家の経営を見直そうと、去年の秋から人吉の企業に就職されている。

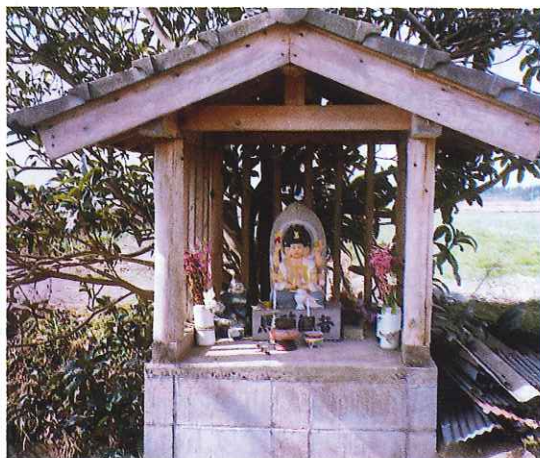
このことについては、平川さん本人も昭和40年代に10年余りに亘って、地元タクシーに乗務された経緯もあり、その体験を英二郎さんにもさせようとの意図があり、数年もすると新鮮な感覚で畜産経営に復帰されるものと期待される。

レポーター

熊本県畜産会相談窓口員 桑原 邦勝



平川さん夫妻



畜舎敷地の一角に祀ってある馬頭観音



粗飼料貯蔵倉庫